

22 洋画家：浅井忠

「日本近代洋画の父」と言われた黒田清輝（1866-1924）（[黒田清輝.pdf](#)）がグレー＝シュル＝ロワン（パリから南東に約 80 キロ）に滞在した後、そこには多くの日本人芸術家が訪れました。その一人に、浅井忠がいます。

浅井忠（1856-1907）は、幼い頃から絵に興味を持ち、1876（明治 9）年に、日本で最初の美術学校として設立された工部美術学校に入学し、イタリア人画家アントニオ・フォンタネージ (Antonio FONTANESI) から本格的に西洋美術を学びました。



ASAI Chu/浅井忠

1889 年に、浅井が中心になって、明治美術会が設立されました。これは、日本で最初の洋画団体でした。浅井は 1898 年に東京美術学校の教授となりましたが、1900 年に 44 歳にして洋画を学ぶためにフランスへ留学しました。浅井は、俳人の正岡子規と親交があり、浅井は病床にある子規に、グレー＝シュル＝ロワンの景色を描いた絵葉書を何枚も送りました。子規が、死を前にして断続的に書いた病床日記「仰臥漫録」（ぎょうがまんろく）には、浅井が送った絵葉書が添付されていました。これらの絵葉書を通じて、日本人はグレー＝シュル＝ロワンの風景を知ることができました。そこには、現在でも浅井がいた頃と変わらない景色が残されています。

浅井は 1902 年に帰国後、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）で教鞭をとりながら、絵画を教える私塾を開いて後進の育成に努めました。浅井の弟子の中から、日本で有名な洋画家が何人も誕生しました。

浅井は、ロンドンに滞在していた作家の夏目漱石（1867 年- 1916 年）と親交がありました。浅井は、漱石の小説「三四郎」に出てくる深見画伯のモデルとなりました。

掲載日：2022 年 1 月 10 日